

# レスポンスデザインの基本

C S S 3 の Media Queries を使用するのが簡単です。

ただし、旧バージョンの I E ( 8 以前) では対応していないため、策を講じる必要があります。(後述)

## C S S の記述について

ここでは、例として 3 通りのパターン (スマホ・タブレット・P C) で書いていますが、4 パターン (スマホ横向き追加) もみられます。

```
@media screen and (min-width: 0px) and (max-device-width: 479px) {  
    479px 以下のデバイス用の C S S  
}  
  
@media screen and (min-width: 480px) and (max-device-width: 768px) {  
    480px~768px のデバイス用の C S S  
}  
  
@media screen and (min-width: 769px) {  
    769px 以上のデバイス用の C S S  
}
```

スマホの Viewport 対策を行う。

Viewport とは、スマホの少ないピクセル数で P C 用サイトを表示するための昨日ですが、レスポンスを行う際には邪魔になるものです。

下記の 2 つのどちらかを使うと解消されますが、それぞれ難点があります。

```
<meta name="viewport" content="initial-scale=1.0">  
<meta name="viewport" content="width=device-width, initial-scale=1.0">
```

上のほうは、windowsPhone の I E に対応しておらず、下のほうは i o s 5 以前に対応していません。

悩みどころではありますが、日本語サイトでありならば、windowsPhone の流通量は圧倒的に少ない点、ios5 は v e r アップ後かなりの年数が経過した os である点を考えると、どちらでもいいかもしれません。

## Retina や 4K 等の高精細ディスプレイ対応

対応しないと画像が荒れてしまいます。

別途用意している PDF の srcset を使用しましょう。

## 製作にあたっての注意点ほか

製作時の width に関しては、スマホは%対応を使うのが基本です。

iPhone とアンドロイドでは解像度が違うことを留意してください。

画像は極力使用しないで製作しましょう。

スマホを考え、リンクボタンは指でタッチすることを計算したサイズで製作しましょう。

上記に書いたとおり、画像ではなく文字 + 背景で。

最近は、P C ではなくスマホでのアクセスをベースにして製作するのが一般的になってきています。

jQuery 使用の際は、レスポンス対応かどうかの確認を怠らないように。

## ※ I E 対策について

head 内に以下を記入しておきます。

1 つ目は H T M L 5 非対応に関する対策、2 つ目は MediaQueries 非対応に関する対策、3 つ目は c s s 3 で導入された :nth-child 等の疑似クラス対策となっており、js ファイルを読み込んで行います。

1 つ目は外部リンク先より読み込み、2 つ目と 3 つ目はダウンロードします。

(ダウンロードファイルとして css3js.zip を用意してあります)

```
<!--[if lt IE 9]>
```

```
<script src="https://cdnjs.cloudflare.com/ajax/libs/html5shiv/3.7.3/html5shiv.js">
```

```
</script>
```

```
<script src="css3js/css3-mediaqueries.js"></script>
```

```
<script src="css3js/selectivizr.js"></script>
```

```
<![endif]-->
```

なお、注意点として

- ・ローカル環境では有効にならない
- ・C S S は外部ファイルから <link> で読み込んだものにのみ有効となっています。